

強者の国語・〔現代文・問題編〕

今回は京都大学の過去問（現代文）です。文理共通問題ですので、志望学部にかかわらずチャレンジしてみてください！ 時間は30分です。

次の文を読んで、後の問に答えよ。

皆人の「からだ」ばかりの寺参り「こころ」は宿にかせぎをぞする（為愚痴物語巻六ノ三）

生きた人間を「からだ」と「こころ」で対立させる二元論的把握は、視野を転じて、言語記号の成り立ちという問題に対しても、アナロジカルに適用することができる。

言語記号は、一定の音声形式と意味とから成り立っている。人間の「からだ」が「こころ」の器であるなら、音声形式も、また、意味の器にはかならない。「からだ」に「こころ」の宿っているものが生きた「身」であるなら、音声形式に意味の宿っているものが、すなわち「語」にはかならない。

語の成り立ちを「身」との対比において把握する観点から、とりわけ注目される問題は、「語」の意味に対応する概念として、「身」の方に、「こころ」という言葉が見出されることである。わが国で、「意味」という言葉が、いつごろから使用されるようになったかは判然としない。*ヘボンの辞書には収められているが、日葡辞書など中世の辞書には見当たらないようである。しかし、「意味」という漢語を知らない時代にも、「意味」を含意する言葉は存在した。それが、「こころ」という和語であったことは、あらためて紹介するまでもない。のみならず、この事実は、たとえ偶然であるかもしれないにせよ、語を人間とのアナロジーで捉える観点から導かれた、「意味」と「こころ」の対応関係にのみじくも合致している。

強者の戦略

一般に、意味論は、意味を客観的認識の対象として、当の言語主体から切り離しすぎたうらみがある。いま、語の意味を、「このころ」という和語によって認識しなおしてみると、語の意味と言語主体の心的活動は、確実に一本のキイ・ワードで架橋されることになるのである。意味論にとって、これは、すこぶる重要な示唆だとはいえないであろうか。

*

共鳴、親愛、納得、熱狂、うれしき、驚嘆、ありがたき、勇氣、救ひ、融和、同類、不思議などと、いろいろの言葉を案じてみましたけれど、どれも皆、気にいりません。重ねて、語彙の貧弱を、くるしく思ひます。(太宰治『風の便り』)

事物は、それを名づける言葉が見出されない限り、存在しないに等しい。言語主体は、なにか明晰めいせきなかたちで認識したいものがあるとき、現在の自分の「このころ」に過不足なく適合する「このころ」を具有した言葉をさがし求める。そうして、該当する言葉がつかまえないとき、自分の「語彙の貧弱を、くるしく思」う。だが、語彙の多寡など、所詮は程度の差である。いくら語彙の豊富な人間でも、自分の「このころ」をぴたりと表現できない苦しみから完全に自由であることはできない。人間の世界は、言葉によって縦横に細分されてはいるものの、語の配分は、決してわれわれの経験世界に密着した精密度で行われているわけではない。②もつとも客観的に見える自然界ですら、実際は、なんら客観的に分割されていないというのが、言葉の世界である。以前、「語彙の構造と思考の形態」と題する小論の中で、次のように述べたことがある。「スペクトルにかけられた色彩を、現代日本語は七色で表わす。しかし英語では六色であり、*ロデシヤの一言語では三色、リベリアの一言語では二色にしか分けない。言語によって、色彩の目盛りの切り方が相違しているのである。これが直ちに言語の構造の問題と結びついていることは、言語構造の概念を説明するための雛型ひながたとして、スペクトルの例が好んで採りあげられることを想起すれば十分である。言語が構造であること、構造とは分節的統一にほかならないことを、ここからわれわれは容易に認めることができる。思考活動は、この目盛りの切り方、言語の構造性に応じて営まれる。同じ虹に対しても、人はその属する言語の構造という既成の論拠の上においてのみ、色合を認知しうるのである。スペクトル中の色帯の数を、ミクロン単位で数えるならば、三七五種の多くにのぼると言われる。それを何色かに分割するということは、無限の連続である外界を、いくつかの類概念に区切り、そこにおける固定した中心、思想の焦点としての名称をもって配置することである。曖昧で不確かで変動しやすい

強者の戦略

人間の知覚は、名称によって新しい形をとり始める。客観的世界ははじめて整理せられ、一定の秩序と形態を与えられる。朦朧もうろうとして不分明な個人の感情、捉えがたい心理の内面も、すべて名称による以外には、自己を客観化し明確化するすべを持たない。スタンダーの『赤と黒』に、ジュリアンとの媾あいびきのあとで、幸福の陶醉に耽ふけっていたその夜のド・レーナル夫人が、突然自分の行為の「姦通」アデユルテールという怖ろしい言葉に宛てはまるのに気づいて愕然がくぜんとする場面がある。言語以前の無意識の状態における個人的感情が、判然たる姿をとってその性格を客観的に現示するものは名称であることを、これは端的に物語っている。考えてみれば、これほど危険千万なことはない。言葉によって、カオスがコスモスに転化することは事実だとしても、そのとき、名づけられたものは、他のあらゆる属性を切り捨てられ、無垢の純潔性を失ってしまう。

ベンジャミン・リー・ウォーフも言うように、言語とは、それ自体、話者の知覚に指向を与える一つの様式であり、言語は、話者にとって、経験を意味のある範疇はんちゆうに分析するための習慣的な様式を準備するものである。言語が押しつける恣意的な分類法、その上に立つ一定数の限られた言葉で、無限の連続性を帯びている内外的世界を名づけること、それは、言語主体に指示して彼を特定のチャネルへと追いこむこと、外部から一つの決定を強制することではないか。もしあなたが、或る人の行為や心理を一つの言葉で名づけるならば、あなたは、その人に、その人の行為や心理を啓示することになる。その人は、名づけられた言葉を手がかりに、あらためて自分をかえりみるだろう。

「泣きぬれた天使」という往年のフランス映画にも、そうした場面があった。ジュヌヴィエーヴは、盲目の彫刻家に対する友情とも憐愍れんぴんともつかない漠然たる心情を、他人から「愛」という言葉で啓示されたとき、自分のすべてが決定されたことを知った。今度は、「愛」という言葉が、彼女の「こころ」を鍛えあげてゆく。或いは、人間の「こころ」が、言葉につかみとられて、否応なしに連行されてゆくのだといってもいい。「愛」とか「嫉妬」とか「憎悪」とかいう言葉が現れると、その言葉とともに、愛や嫉妬や憎悪が結晶してくる。もやもやした感情を、「愛」でとらえるか、「嫉妬」でとらえるか、「憎悪」でとらえるか、結びつき次第で、彼の運命は大きく違ってくるであろう。彼は「愛」をそだてることに成功するかもしれない。「嫉妬」に懊惱おうのうする男になるかもしれない。「憎悪」のあまり、女を殺す大罪を犯すに至るかもしれない。

人間の「こころ」と言葉の「こころ」との間には、相互にはたらきかける二つの力がある。一つは、言葉の「こころ」が人間の「こころ」に作用する力であったが、もう一つは、人間の「こころ」が、言葉の「こころ」に作用して、それを変えてゆく力である。言葉が、人間世界の細目に対してごく大まかにしか配置されていないものである以上、われわれは、自分の「こころ」を、適切な言葉によって表現できないという不幸を宿命的に負わされている。どうしても、「こころ」を託すべき言葉がなければ、穴埋めに、新語を創造し、古語を復活し、外国語を借用するという方法も講ぜられる。

人間は、絶えず、その人その時代に固有の「こころ」を持った言葉をさがし求めていくものだ。新しい「こころ」は、それを関連づけることできそうな「こころ」を持った言葉を見つけて、その中に押しこまれる。あとから押しこまれた方の「こころ」が、人々から強力に支持されつづけければ、新しい「こころ」は、古い「こころ」を押しつけて、新規にその主人ともなりうる。言葉の「こころ」を変える力は、すなわち、人間の「こころ」であって、言葉の「こころ」が、人間から独立して、勝手に変わるのではない。言葉の意味変化が、人間の「こころ」の変化を前提とする以上、人間の「こころ」の側から、言葉の「こころ」が追究されなければならないのは当然であろう。④意味論は、人間の「こころ」と言葉の「こころ」の相互関係を究明する「こころ」の学とならない限り、人間の学としての「意味」を持ちえないといっても過言ではない。

(佐竹昭広「意味変化について」より。一部省略)

注(*)

アナロジカル || analogical 「類推による、類推的な」の意。

ヘボンの辞書 || ジェームス・カーティス・ヘボンによって幕末に編纂された、英語による日本語の辞書。

日葡辞書 || ポルトガル語による日本語の辞書。一六〇三年から一六〇四年にかけてイエズス会によって長崎で出版された。

ロデシャ || アフリカ大陸南部の地域名称。現在のザンビアとジンバブエを合わせた地域にあたり、二〇以上の言語が話されている。

同じく西アフリカのリベリア共和国も三〇近い言語が話されている多言語国家。

強者の戦略

問一 傍線部(1)はどのようなことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどのようなことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)はどのようなことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)のように筆者が考えるのはなぜか、説明せよ。